

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2018.7) 平成29年度:60.

2型糖尿病患者の初回入院中の自己管理への意識とその変化—心理的  
危機的状況にある事例への関わりから—

苅田 灯

## 2 型糖尿病患者の初回入院中の自己管理への意識とその変化

### —心理的危機的状況にある事例への関わりから—

キーワード：糖尿病、初回入院、自己管理、危機的状況

○荻田 灯

旭川医科大学病院 7 階東ナースステーション

#### I. 目的

2 型糖尿病患者が初回入院で抱いた糖尿病への意識とその変化を明らかにすることで、入院中に自己管理に関心を持ってもらうために必要な看護師の支援について示唆を得ることを目的とする。

#### II. 方法

##### 1. 研究デザイン：事例研究

2. 研究対象：両増殖糖尿病網膜症の術前血糖コントロールのため B 病院に入院した糖尿病での入院が初回である 2 型糖尿病患者の 60 代の女性患者 1 名。

3. 研究期間：2016 年 10 月～2016 年 12 月

4. データ収集：対象患者が入院してから退院するまでの期間における診療（看護）記録から、患者の反応と看護師の関わり・介入を振り返った。

5. 分析方法：患者の疾患や疾患管理に対する意識に関する記述、看護師の介入に関する内容を抽出し、得られたデータをコード化し分析を行った。

#### III. 倫理的配慮

文書と口頭で患者に研究目的、方法、研究への参加は自由であり、参加を拒否した場合でも不利益は生じないこと、個人情報保護、同意の撤回が可能であることなどを説明し同意を受けた。本研究は研究者の所属する施設の倫理委員会の承認を得て実施した。本演題発表に関連して、開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

#### IV. 結果

①入院初日から 3 日目：A 氏は入院前〈視力低下や失明への恐怖〉〈病院へ行くことへの恐怖・嫌悪感〉があったため、看護師は、視力低下に伴い ADL に影響も出ている A 氏の気持ちを理解することに努めた。徐々に〈手術のために血糖値を改善する必要性〉〈家族に頼らず自分も疾患管理について気を付ける必要性〉を感じていた。

②入院 4 日目～7 日目：A 氏は自分の血糖値に関して理解できていない状況にあった。看護師が体調について

変化はないか確認することで〈自覚していた身体症状が入院後に軽減したことへの気づき〉を体験していた。  
③入院 11 日目～21 日目：A 氏は〈疾患管理のために自分なりに行おうと考えている対策や良くないと考えられる行動〉を話すことができるまでとなっていた。〈自分でも運動療法を行うことが可能かもしれないという意識〉と〈他者の援助があれば部分的に疾患管理行動への参加が可能ではないかという意識〉も見られた。

#### V. 考察

糖尿病患者の心理的・危機的状況は「糖尿病と診断されたとき」「治療法が強化されたとき」「重大な合併症が発症したとき」に起こると考えられている<sup>1)</sup>。A 氏は、入院当初、視力低下や失明への恐怖があまりにも強く、そのような危機的状況の中で現実に向き合うことができない状況にあった。看護師が A 氏の気持ちを受け止めることで、A 氏は自身の感情を整理し、自己管理する意識が芽生えた。したがって、危機的状況にある患者には、糖尿病や合併症に対する恐怖を十分に理解し関わる必要があると考える。

入院生活の中では、看護師が A 氏の体調を確認することで、A 氏も治療の効果を実感していった。さらに、体調の変化を実感することで糖尿病や合併症への恐怖が和らいでいった。したがって、危機的状況にある患者には、知識だけではなく身体的な変化とその要因が実感できるように関わるのが重要と考える。

#### VI. 結論

1. 初回入院患者の糖尿病や合併症に対する恐怖を十分に理解し、感情を整理する過程を支援することが自己管理への意識へとつなげていく上で重要である。
2. 身体的な変化やその要因を実感できるような関わりは、糖尿病や合併症の診断により心理的・危機的状況にある患者の気持ちの負担を和らげるために重要である。

#### 引用文献

- 1) 日本糖尿病教育・看護学会編, 糖尿病に強い看護師育成支援テキスト(第 1 版), 日本看護協会出版会, p49, 2008